

ドヴォルザーク作曲「ピアノ五重奏曲イ長調作品81」に関する一考察

—— ドゥムカ、フリアントにおける民族性を視点として ——

村 澤 由利子

(キーワード：ドヴォルザーク, ピアノ五重奏曲, ドゥムカ, フリアント)

はじめに

2002年11月にフィルハーモニア・カルテット ベルリンとシューマンの「ピアノ五重奏曲」を共演し、2004年11月にはブラームスの「ピアノ五重奏曲」を再び共演した。2007年1月に三度目の共演を行うこととなり、クラシックの三大ピアノ五重奏曲として残る一つのドヴォルザークの「ピアノ五重奏曲」を取り上げることとなった。この演奏に際し、シューマン、ブラームスとドヴォルザークの関係について、またこの曲を演奏した際に感じたドヴォルザークの哀愁を帯びたメロディ、これは日本人に大変親しみやすいが、そのなかに民族性を感じ、この曲について研究と考察を行った。

アントニン・ドヴォルザーク Antonin Dvořák (1841. 9. 8 – 1904. 5. 1)

クラルビ近郊のネラホゼヴェス(チェコ、プラハの北40km 現在のチェコ共和国、分裂前はチェコスロバキア)に生まれる。かつてはボヘミア地方とも呼ばれた。チェコでは、スメタナ、ヤナーチェクと共に民族主義運動の偉大な3人の作曲家とされている。

ドヴォルザークは最初、村の学校の教師に音楽の手ほどきを受けて、教会や村の楽団での演奏をする程度であった。家業の肉屋の修業に必要なドイツ語の勉強のために進んだ学校で、音楽教師に出会い音楽の才能を認められ、北ボヘミアの学校に進み、更にプラハ・オルガン学校に進学した。そこで音楽家への正規の訓練を受け、有能なヴィオラ奏者として音楽の道を進んだ。卒業後はボヘミア民族文化活動の高まりの中でオーケストラの団員として活動し、指揮者として活躍していたスメタナの下で過ごしている。この頃より作曲活動も始めており、スメタナの指揮で彼の曲が上演されている。30歳を過ぎて、作曲家として認められたが収入が少ないために、オーストリア国家奨励賞に応募して(当時チェコはハンガリー・オーストリア帝国の属領であった)、この審査委員の1人であったブラームスに才能を認められた。賞金の獲得と、後にブラームスが出版社ジムロックを紹介し、スラブ舞曲集の出版に至った。この曲によって一躍ドヴォルザークは有名になり、作曲家として安定した名声を獲得した。この後多くの曲を作曲するが、特にユーモレスクに代表されるピアノ曲や室内楽曲にその才能を発揮した。彼は有名な第9番「新世界より」を含め9つの交響曲とピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲そして、ドヴォルザークの代表作の一つとして広く愛好されているチェロ協奏曲を作曲している。現在、ピアノ協奏曲は演奏される機会が少ない。

ドヴォルザークの曲の旋律は、ボヘミア民族性が基礎にあるとされる。彼は1892年にニューヨーク・ナショナル音楽院院長として2年間アメリカで務めたが、その後は故郷ボヘミアの田舎で多くの時間を過ごしている。オペラの作曲にも意欲的に取り組んだが「ルサルカ Op. 114 1900年」以外は成功したとはいえなかった。しかし「スターバト・マーテル Op. 58 1876~77年」に代表される合唱曲や多くの声楽曲、ピアノ曲、室内楽曲も作曲しており、特に室内楽曲においては、ブラームスに次いでその才能が発揮されている。

中でもピアノ曲や弦楽曲の中でドゥムカ(Dumka)と名付けられた作品や楽章は、民族性と共に彼の瞑想的な作風をよく表している。ドゥムカはチェコ・ポーランド語で熟考することを意味し、「ピアノ三重奏曲」に名付けられたドゥムキー(Dumky)はドゥムカ(Dumka)の複数型の言葉である。音楽の表現としてはメランコリー(感傷的)とか黙想的な気分だと考えられている。著者と共演した、フィルハーモニア・カルテット ベルリンのメンバーも第2楽章のドゥムカをメランコリックに表現するのだと、コンサートのリハーサルで確認していた。

ドゥムカの表題は19世紀のポーランド、ウクライナ、ロシアの多くの作曲家により用いられて、スラブのダンス曲またはウクライナの民族音楽の一種と考えられている。4分の2拍子でゆるやかな悲しいメロディと速い情熱的なメロディが対照的に出てくる、スラブ民族的な哀調と熱情にあふれる曲とされる。ドヴォルザークはボヘミア音楽の代表のように見られていたのだが、彼のドゥムカに良く民族性の表れを見られるとして、汎スラブ的とも考えられていた。

Op.35のピアノ曲に見られたドゥムカは、Op.81のピアノ五重奏曲で良く知られることになり、この五重奏曲の印象が第二楽章のドゥムカに代表されるように思える。

ピアノ五重奏曲第2番イ長調作品81

・その成立と背景

すでに作曲家として名声を得たドヴォルザークは1887年にピアノ五重奏曲を作曲して、ベルリンのジムロック社から1888年に出版した。この曲はシューマンのピアノ五重奏曲とブラームスのピアノ五重奏曲と共に、クラシック界の三大ピアノ五重奏曲として知られ、しばしば演奏される曲である。1890年には「ロンドン」の名前で呼ばれる交響曲第8番を完成させて、イギリスのロンドンでノヴィロ社から出版した。この年にはチャイコフスキーとの親交により、招かれてモスクワ訪問を実現させた。更に1891年にはアメリカのニューヨーク・ナショナル音楽院の院長に就任を依頼され、赴任することになる。この第2番のピアノ五重奏曲は、この様に国際的に活躍し、作曲家として充実した時期の始まりに、作曲された曲である。さらに、彼が器楽曲や室内楽曲でしばしば取り上げたドゥムカが第2楽章に置かれ、それゆえに、この曲がいつそう親しまれることになる。

ドヴォルザークを作曲家として有名にした曲の1つにスラブ舞曲がある。第1集Op.46は1878年に4手のピアノ連弾曲として作曲され、出版と同時に好評のため管弦楽曲版の出版も決まった。今日ではオーケストラでの演奏がむしろ広く知られている。第2集の作曲がジムロック出版社から依頼されたが、彼は1886年6月にこの曲集の作曲に取りかかり、7月に4手ピアノ連弾曲Op.72として完成させている。管弦楽曲への編曲は同年に完成している。翌年の1887年8月に田舎の別荘でピアノ五重奏曲イ長調の作曲を開始した。その後1888年1月6日にプラハの市民クラブで初演された。

作曲家として円熟期にあったドヴォルザークは、スラブ民族的な音楽家とも言われ、それは彼の作曲に元来はスラブ民族、ウクライナ地方の民族舞曲であるドゥムカを取り上げていることに表われているからであろう。しかし彼はボヘミア的とも言われ、それはフリアントというボヘミアの民族舞曲も同時に取り上げている。ピアノ五重奏曲Op.81にもその両方が取り入れられている。

彼の音楽には郷土の色彩と、彼独特の哀愁を帯びた雰囲気が多くの人々に好まれる理由とされる。それは彼の作曲のメロディや交響曲に見られるイングリッシュホルン等の楽器の使用法に強く表れている。1892年10月からアメリカで音楽院院長として活動しながら、交響曲第9番「新世界より」を作曲しており、弦楽五重奏曲と弦楽四重奏曲「アメリカ」もこの時期に作曲されている。これらの曲にはアメリカ黒人音楽の影響があるとも言われることもあったが、今日では、基本的にドヴォルザークの作曲した音楽は、ボヘミア的なメロディであると考えられている。これらの曲がアメリカで熱狂的に受け入れられたにもかかわらず、ドヴォルザークは望郷の念が強くなり、ボヘミアの田舎に帰り、その後の生涯をそこで過ごすことから伺える。

このピアノ五重奏曲には、第二楽章にドゥムカ（Dumka）と第三楽章にフリアント（Furiant）の名称がつけられているが、いずれもスラブ、ウクライナの民族舞曲に由来すると考えられている。ドゥムカの名称がつけられた曲を、ドヴォルザークは他にいくつも作曲している。6つの曲で構成されるドゥムキー（ドゥムカの複数型）と名付けられたピアノ三重奏曲Op.90もその一つであり、この曲の前にはピアノ曲にもドゥムカと名付けられたOp.35とOp.12-1があり、Op.12-2はフリアントと名付けられている。スラブ舞曲第1番や弦楽四重奏曲Op.51のドムカに見られるように、第二楽章の主題は郷土の民謡旋律構成の特徴的な要素を含んでいる。フリアントにおいても、またその激しくそして哀調を帯びる部分が交互に現れることは、民族音楽の特徴的なことと見られる。

・第2楽章ドゥムカ、第3楽章フリアントを中心とした曲の構成

ドヴォルザークの五重奏曲には

- ・Op. 1 (弦楽四重奏と第2 ヴィオラ) イ短調 1861年
- ・Op. 5 (ピアノと弦楽四重奏) イ長調 1872年
- ・Op. 77 (弦楽四重奏とコントラバス) ト長調 1875年
- ・Op. 81 (ピアノと弦楽四重奏) イ長調 1887年
- ・Op. 97 (弦楽四重奏と第2 ヴィオラ) 変ホ長調 1893年

以上の5曲があり、現在は失われた「クラリネット五重奏曲」変ロ短調もある。この中で最も良く演奏されているのが、このOp. 81のピアノ五重奏曲である。彼はブラームスとの交流を得てから作風に影響を受け、しっかりとした構成とともに若い頃から影響を受けていたワーグナーの和声法も取り入れている。一方でチェコの民族性が特に色濃く感じられ、ドヴォルザークの最も充実した音楽様式を示す作品となっている。4年後に作曲されたピアノ三重奏曲「ドゥムキー」には6曲のドゥムカからなるが、このOp. 81のピアノ五重奏曲は、第2楽章にスラブ民族の民族舞曲のドゥムカ、第3楽章にスケルツォ Scherzo (フリアント Furiant: ボヘミアの民族舞曲) のタイトルが付けられている。

今回はドヴォルザークの民族性を取り上げ、この2つの楽章について詳しく述べる。

第1楽章 アレグロ・ノン・タント イ長調 2分の2拍子

ピアノの流れるような前奏に始まり、チェロの憂いを帯びた、夢見るようなメロディが歌われる。このピアノに始まりチェロに受け継ぐ形は、Op. 5のピアノ五重奏曲と同じ導入の形である。第1楽章は全体にソナタ形式であるが、ソナタとは異なる新しい様式が感じられ、起伏に富んだダイナミックな楽章である。

第2楽章 ドゥムカ アンダンテ・コン・モート 嬰へ短調 4分の2拍子

ドゥムカとはメランコリックなスラブ民族舞曲の名称であるが、ドヴォルザークにおいては、チェコ語で瞑想を意味するドゥムカを念頭に置いて書かれたと考えられている。本来の民族舞曲のドゥムカの特徴に正確には合わず、むしろドヴォルザークは彼独自の音楽として作曲している。ドゥムカは多くは緩やかな哀愁を帯びたメロディと速い情熱的なメロディが交互に出てくるが、ドヴォルザークはその形式に必ずしも縛られていない。第2楽章はロンド形式をとっていて、3部形式となる。

第1部はピアノで哀愁を帯びた主題が奏され、ヴィオラ、第1ヴァイオリンに対位旋律として受け継がれる。(第1～第15小節: 譜例1)

譜例 1

Dumka.

第42小節からウン・ポケッティーノ・ピュウ・モッソ *Un pochettino piu' mosso* に変わり、ニ長調の明るく陽気なメロディが第1ヴァイオリンで奏される。(第42～第50小節：譜例2)

譜例 2

第77小節からテンポ・プリモ *Tempo I* となり、もう1度最初の主題が繰り返される。(第77小節～第80小節：譜例3)

譜例 3

次に第2部の中間部第113小節からヴィヴァーチェ *Vivace (quasi l'istesso tempo)* となり、前半部分が対象的な速く激しい感情を表した音楽となり、ヴィオラからヴァイオリンそして最後にピアノへとメロディが受け継がれる。(第113小節～第120小節：譜例4)

譜例 4

第178小節からテンポ・プリモ Tempo I となり、はじめの速さに戻り、第3部は第1部と同じメロディが変化して出てくる。(第178小節～第185小節：譜例5)

譜例 5

最後はメノ・モッソ Meno mosso, テンポ・プリモ Tempo I となり、最初の主題よりも、いっそうゆっくりとした主題を奏して静かに終わる。

第3楽章 スケルツォ (フリアント) Scherzo (Furiant)

モルト・ヴィヴァーチェ Molto vivace イ長調 4分の3拍子

フリアントはボヘミアの民族舞曲で3拍子と2拍子のリズムが交互に出てくる。テンポの速い活発な舞曲のことである。第2楽章と同じ3部に分かれており、最初は大変親しみやすい活発なメロディが第1ヴァイオリンで始まり、ピアノへとメロディが受け継がれる。(第1小節～第18小節：譜例6)

譜例 6

Scherzo.
(Furiant.)

Molto vivace.

Molto vivace.

第142小節からポコ・トランクイロ *Poco tranquillo* となり、静かで落ち着いた音楽となるが、第1部の出だしのメロディが少し変化して、ゆったりとピアノ (p:弱く) で奏される。(第142小節～第154小節：譜例7)

譜例 7

Poco tranquillo.

Poco tranquillo.

第3部は第264小節からテンポ・プリモ *Tempo I* となり、ピアノのメロディに弦楽器が同時に奏し、第1部と同じメロディが変化しながらフォルテッシモ (ff:大変強く) で力強く終わる。(第264小節～第271小節：譜例8)

譜例 8

第4楽章 フィナーレ Finale (終曲) アレグロ Allegro イ長調 4分の2拍子

ピアノと弦楽器で11小節の序奏の後、第1ヴァイオリンが軽快で流れるような第1主題を奏し、ピアノに受け渡す。中間部では大変ボヘミアらしい哀愁を帯びたメロディが奏され、展開部では第1主題が変化したフガートが第2ヴァイオリンから第1ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、ピアノと奏され、フォルテッシモ *ff* まで盛り上がりを見せる。最後のコーダは、ピアノニッシモ *pp* からフォルテッシモ *ff* へとクライマックスとなり、みごとな集結を見せる。

この曲は、全楽章を通じてドヴォルザークの民族主義的な作風が感じられ、彼の充実した最盛期の作品であると感じた。

考 察

1843年に出版されたシューマンの「ピアノ五重奏曲 Op. 44」、1865年に出版されたブラームスの「ピアノ五重奏曲 Op. 34」と共に、1888年に出版されたドヴォルザークの「ピアノ五重奏曲 Op. 81」は、曲の構成やその音楽的内容、演奏される頻度などで「三大ピアノ五重奏曲」と言われている。

ドヴォルザークは交響曲第9番「新世界より」で広く世界中に知られた作曲家であり、ベートーヴェンの交響曲第5番「運命」と並び、日本でも最も多く演奏される交響曲である。チェロ協奏曲も大変親しまれており、弦楽四重奏曲「アメリカ」もよく知られている。これらの曲は、彼の最も充実し、アメリカに滞在した時期に発表され、大成功を収めた曲である。これらの曲にはアメリカの黒人やインディアンなどの音楽の影響を見る人もいるが、基本的には彼の故郷ボヘミアの民族性や、ドヴォルザークの特色が強く出された曲であるとの評価で、ほぼ一致している。音楽の次に彼が愛したものは汽車（機関車）と鳩であったが、作曲の合間に、よく汽車を眺めに行っていたそうである。彼の人柄を示す一面である。

彼がこのアメリカ行きの直前にボヘミアの田舎に滞在しつつ作曲したのが、室内楽曲では「ピアノ五重奏曲 Op. 81」であり、「スラブ舞曲第2集」である。このピアノ五重奏曲は第二楽章にドゥムカ、第三楽章にフリアントと名付けられている楽章を持っている。いずれも民族舞踊の名称で、ドゥムカはスラブ民族舞踊でロシア、ウクライナで見られ、フリアントはボヘミアの民族舞踊で、3拍子と2拍子が交互に出てくるテンポの速い活発な舞曲である。

チェコやポーランドにもドゥムカの言葉があり、むしろドヴォルザークの音楽はチェコの言葉で現される瞑想的な感情が、ロシア民族舞踊のメランコリック・哀愁を現すよりも似つかわしいと思える。1890年に「ピアノ三重奏曲 Op. 90 ドゥムキー (Dumky)」を作曲して、チェコのボヘミア地方とモラビア地方を、アメリカへの出発前の告別公演（40回の演奏会）で巡回している。

スラブ舞曲は第1集、第2集共に8曲からなる4手ためのピアノ曲であるが、ここでもフリアント、ドゥムカ、そのほかにも民族舞踊の名称を持つ曲で構成されている。彼の民族性は一貫してその作品の中に流れているが、メロディはあくまでもドヴォルザーク独自の作風であり、交響曲「新世界より」の第二楽章のイングリッシュホルンの奏でる有名なメロディをはじめ、広く親しまれる曲が多い。このような時期に作曲されたピアノ五重奏曲 Op. 81は、その第二楽章にドゥムカを、第三楽章にフリアントを持ち、三大ピアノ五重奏曲として、しばしば演

奏会で取り上げられている。今回コンサートのアンコールとして、再度第三楽章のフリアントを演奏したが、舞曲であるために、演奏するたびに趣を変えることができた。

フィルハーモニア・カルテット ベルリンの奏者とも、リハーサルでドゥムカについて話し合いをしたことで、演奏において理解を深めることができた。そして今回のドヴォルザークについて調べていく中で、彼の祖国への思いや、彼が育ったチェコの民族性が日本人に好まれるのは、ドゥムカの哀愁を帯びたメロディや、フリアントに見る情熱的な感情が、彼自身の作品や作風の中に強く感じられるためであることを良く理解することができた。

また、演奏している中で、シューマンやブラームスの作風の影響を受けていることを感じていたが、ブラームスはシューマン夫妻と親しかったが、それ以上にドヴォルザークと兄弟のような親しい交流をしていたことが判り、その影響を受けた理由も理解できた。

参考文献

1. 最新名曲解説全集第13巻 室内楽曲 Ⅲ 音楽之友社 1981
2. ニューグローブ世界音楽大事典11 講談社 1994（原著1980）
3. 西洋音楽史大系 8 （ブラームスとフランツ・ヨーゼフの時代）（株）学習研究社 1999
4. 新訂標準音楽辞典 音楽之友社 1991
5. 作曲家別名曲解説ライブラリー ドヴォルザーク 音楽之友社 1993
6. 内藤久子著 作曲家・人と作品シリーズ ドヴォルジャーク 音楽之友社 2004
7. 新訂大音楽家の肖像と生涯 音楽の友社 1962
8. 中村孝義著 室内楽の歴史 東京書籍 1994
9. 属啓成著 名曲事典 音楽之友社 1985

参考 CD

・ Kevin Bazzana ; Antonin Dvořák , The Complete Works for Solo Piano

引用楽譜

1. Antonin Dvořák Quintett A-Dur Op.81 N.Simrock

A Study of the Dvořák Piano Quintet in A Major, Op. 81

— Bohemian Traits with his music, especially Dumka and Furiant —

MURASAWA Yuriko

Schumann, Brahms and Dvořák's piano quintets are famous for three great music.

I performed the Dvořák piano quintet A major Op.81 in 2006 in Tokyo, and in 2007 in Tokushima.

I studied Dvořák's chamber music in his Bohemian traits with Dumka and Furiant.